

旧研究所スタッフ随想 3

「常磐松二号館時代」の思い出

齋藤 ミチ子

はじめに

退職してほぼ 10 年を経た今日、在職中の 40 年余に及ぶ思い出のくさぐさは、一朝一夕には整理がつかねる。そのため、記述内容にバランスを欠くむきもあるが、脳裏に浮かぶ事柄を順次書き連ねてみることにした。乱雑無章のほどをご容赦願いたい。

私が研究所に入った頃は、まだ李王邸に研究室が設置され、一部は図書館棟の中に分室が設けられていた。李王邸の庭先には、見事な八重桜があって、二階の窓から掌に受けた花房の感触をいまだに思い出す。

日本文化研究所発足以来、その後、研究所は紆余曲折、機構内容の整備、発展に応じて、施設および建造物も幾たびか変わったが、私の場合は、図書館の間借り時代を経たのち、後に李王邸の跡地に建て替えられた「常磐松 2 号館」に落ち着き、研究所生活のほとんどをそこで過ごした。

「梧鼠之技」のしごと種々相

梧鼠之技とは、何でも屋、器用貧乏で周囲の人様にとって重宝の意であるが、私は入所して久しい間、自虐的にこの言葉が脳裏に浮かんでならなかった。後で考えてみると、所の機構上の不備がもたらす矛盾、加えて業務を差配する御仁の個性などがあいまって動く斯界の中で、文字通り孤軍奮闘していたということであろう。

入った当初は、刷り物の塊や不揃いの書物などの整理にもっぱら明け暮れていたもので、研究業務に従事とのお声掛けで、こちらに呼ばれた筈と、いぶかる私に、研究活動の前提として、環境を整えるための前作業であるとの説明であった。

時を前後して、河野省三博士の蔵書受け入れの準備の一作業として、博士宅へ参上し、そちらの蔵書の整理も託された。一人、お屋敷に泊めて頂きながらの、埃と鼠の糞との格闘は、今でも苦い思い出であるが、唯一、省三博士ご令室のお心入れの朝餉が懐かしく思い出される。いずれにせよ、その後も続いた各様の梧鼠之技の経験は、心身ともかなりの忍耐力を養うこととなった。

次いで『分類食物習俗語彙』編集作業が始まった。編集の前作業として柳田国男の手書きのカードを拝借して、柳田特有の筆癖や引用文献の略記述の解説を行いながら、筆写による新カードの作成。データ処理機能が今日のように進歩していたら、どのような展開を見せたか、複雑な感慨を感じる。柳田カードに欠落していた山菜類の、データ補填にそなえて出かけた、資料収集旅行で覚えた開放感を、鮮明に思い出す。結果的に、この企画によって、食文化の基層についての関心が触発され、その後の食を巡る諸々の研究活動へと紐帯することになったといえようかと思う。

この頃、故・馬淵東一氏のご指導によって長年続けてきた沖縄の女性祭祀研究は、個人宅

で行ってきたのを、当時の所長の許可を得て、研究所に場を借りて研究会を継続させることができ、個人的な動向については、本来の業務に支障がない限り、自由であったので、イザイホーの調査をはじめ、沖縄の調査は数年の間継続した。

この時期、沖縄地域のフィールド調査を重ねる機会をもてたことは、その後のこの地域社会の急速な変貌、伝統文化の衰退現象を鑑みると、幸いであったと思う。

大学の委託業務を巡って

大学付置になった後、本校からの委託業務に携わることも少なくなかった。私に関わった主だった事業を記せば、まず『芳賀矢一選集』の編集業務が上げられる。芳賀矢一は明治、大正期の国文学者として、研究領域は広く、加えて、その頃の学識者が概ねそうであったように、関心事も多岐に亘っていた。そのため、扱う資料も膨大で、整理、編集、加えて解説の代筆などと、かなりの時間を要した。しかし、はからずも、民俗学の萌芽期といえる大正期の柳田と芳賀との密かな確執を認める資料を見出すなど、思いがけぬ収穫もあった。

また、大学は、百周年記念行事の一端として、国外から前途ある研究者を招聘、援助する企画をたてた。研究生生活を1人につき2年間保証するという条件で、まずモンゴル民族（中国・内モンゴル自治区）から、若手研究者3名を各2年ずつ招いた。その際の研究室の提供、おのずから伴う面倒見を研究所側が担うことになった。6年間に亘ったこの件を、研究所の50年の歴史の一駒として特筆しておこう。

1985年4月から1987年4月まで布仁巴図（プリンバトウ、文学部）、1987年4月から1989年3月まで芒来夫（マンライフ、法学部）、1990年5月から1992年3月まで武勝利（イラータ、経済学部）といった新進気鋭の3氏が選ばれて来日した。その受け入れ先は、研究フォローは各部門の教員各位、その他研究生生活に関するすべてを研究所が担った。そして彼等の机は我が研究室に置かれた。6年に及ぶ彼等の動向は、研究室内に止まらず、多様な場面で多くのエピソードを残していった。同じ研究室で過ごした私としては、時には煩累を逃れたい衝動にかられる時もあったものの、今にして思えば、意義のある日々であったといえるかも知れない。彼等は現在、2人はそれぞれ文学部、法学部の教授、1人は大学教員から日中合弁企業に移り、現在、管理職などなど、各分野でそれぞれ活躍している。彼等は今もって、往事の研究所で過ごした日々を、折に触れ懐かしむ。そのよりどころは、研究所のスタッフ各人が、常時何くれとなく、暖かい対応を惜しまなかった点にあるようだ。

私どもは折角の絆を大切にまで今日に至っている。当方でもかの地へ赴き、彼らの協力を得て、内モンゴル、わけても牧民の食文化や信仰の様相を中心とした調査などを行うことができ、草稿作成もすることが出来た。今や、彼の地もご多分に漏れず、近代化が急速に進み、社会変化が著しい。時宜を得た採訪であったと痛感している。

そもそも、研究所を特徴づける点のひとつに、スタッフの顔ぶれが比較的多様であることがあげられよう。その上、外来の方々の出入りに寛容であり、理解がある。交流も比較的盛んであった。こうした特徴を基盤として、大学側からの委託により、しばしば外来の短期研究者に研究の場や機会を提供した。一時期、学内の中国をはじめアジア圏の招聘研究者もよく顔を見せた。2、30年前のかの国々の方々は、海外留学はまだ珍しいことで、エリートとはいえ、留学先の会話能力をつける機会を得ぬまま来日するようであった。思い出すたび、顔が緩んでしまう閑話の一つ。来日したばかりの女性の研究者が、学内で先生方と行き交う

ごとに声をかけてくれるので当惑する、どうしたものかとの相談に、以下のごとき私の苦肉の策の提案。「お陰様で……」と首を傾げて微笑む。次いで先方が何か言ったら、「いずれ又……」と喋って会釈して失礼する。実際、この手で暫く凌いだらしい。この種の思い出草は枚挙にいとまがない。

風吹き雲を吹き払う

既述したような状況での歳月、研究所に離れがたい愛着を持続できたのは、所内のスタッフ、わけても重鎮世代ではなく、若年世代の方々からの援護、加勢に恵まれたが故であったと思う。その一つ一つの具体的な場面を追想すると、今でも胸が熱くなる。

爾来、私は遅まきながら己の意図する研究活動、あるいは充足感を覚えることが出来る仕事に専念できるようになった。

退職の数年前には、「食と心—食文化にともなう精神性を探る—」をテーマとした講演会・シンポジウム・出版といったシリーズ行事の遂行を担ったが、企画から関係スタッフの選定、ポスター、本の装丁に至るまで、己の思うまま自由にさせて頂いた。この頃は、夜半タクシーで帰宅という日々も珍しくなかったが、いっこうに苦にならず、充足した明け暮れであった。遅まきながら、こうした経験をもてたことは有り難かった。

その後も新風は吹き抜けて、今や、研究所の機構も著しい変貌をみせ、その推進を往時の若手の研究者が担っていることも納得がゆく。徐々に女性の登用も拡大し、また女性も呼応して、大いに活躍されている様子を目の当たりにするのも嬉しい限りである。

末筆になってしまったが、かつて私が研究を進めるにあたり、古社大社のご協力は不可欠であったが、この点で、私は諸社から多大な恩恵をこうむった。往訪する時期が、常に行事や祭儀が行われるご繁多の時に、いつも恐縮であった。にもかかわらず、常にお厭いもなく、対応して下さり、ご協力くださった。貴重な映像資料を残すことができたのも、そのお陰であると、心から感謝している。